

富士見町遺跡（第11次）
発掘調査報告書

2023年7月

安西工業株式会社

例　　言

1. 本書は、安西工業株式会社がエスリード株式会社（以下、事業者）から委託を受けて実施した富士見町遺跡第11次発掘調査報告書である。
2. 本調査は名古屋市中区大井町301番、324番における集合住宅建設工事に先立ち実施したものである。
3. 発掘調査は名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室（以下、教育委員会）の指導、監督のもと実施した。
4. 発掘調査の面積は220m²である。
5. 発掘調査の期間は、2022（令和4）年10月24日から11月8日である。
6. 発掘調査及び整理作業の体制については後述する。
7. 発掘調査に伴う空中写真測量等は安西工業株式会社工事部の榎孝治・鈴木敏雄・山本訓が行った。
8. 第1図・第2図は名古屋市住宅都市局作成の都市計画基本図（縮尺1:2500）に基づいて作成した。方位及び座標は世界測地系 平面直角座標系第VII系を、標高はTP：東京湾平均海面高度に準拠した。本書における色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を用いた。
9. 本書に使用した遺構写真は安西工業株式会社文化財調査部の永井信弘が、遺物写真は久富正登・齋藤友富哉が撮影した。
10. 遺物整理並びに遺物実測図作成、遺構・遺物実測図のトレースは岩本めぐみ・吉盛莉世・豊田礼子・宮原みゆき・辻本雅子が行った。
11. 遺物番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、番号の前に遺構の種類を記した。遺物番号については種別ごとに分け、通し番号を付した。なお、挿図の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。
12. 本書の執筆は第2章第1節及び第3章を教育委員会の林順が、第1章・第2章第2節・第4章第1節、第2節、第3節1・2は永井・久富が、第4章第3節3は齋藤が、第5章は久富が行った。文末に文責を明記した。編集については教育委員会の指導のもと安西工業株式会社文化財調査部の岩本・吉盛の協力のもと久富が行った。
13. 注釈・参考文献は文中（ ）で示し、巻末に一括して掲載した。
14. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて教育委員会で保管している。

本文目次

例言

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 調査の概要	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の体制	5
第3章 試掘調査	7
第1節 調査方法	7
第2節 調査成果	8
第4章 発掘調査	11
第1節 調査の方法	11
第2節 調査の経過	11
第3節 調査の成果	14
1. 基本層序	14
2. 遺構	14
3. 遺物	18
第5章 まとめ	23
第1節 遺物について	23
第2節 遺構について	23
第3節 既往調査と遺溝の分布について	23

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2	第7図 遺構全体図及び土層断面図	15・16
第2図 富士見町遺跡既往調査区位置図	3	第8図 SDO1 平面図及び土層断面図	17
第3図 試掘調査トレンチ配置図	7	第9図 出土遺物実測図2	19
第4図 基本層序模式図	8	第10図 出土遺物実測図3	21
第5図 出土遺物実測図1	9	第11図 周辺調査区合成図1	25
第6図 調査地地区割図	11	第12図 周辺調査区合成図2	27・28

表目次

第1表 遺物観察表	22
-----------	----

写 真 目 次

写真1 遺物洗浄作業	6	写真16 2トレンチ東側壁面の状況（西側から）	10
写真2 接合復元作業	6	写真17 2トレンチ西側壁面最下層付近（東側から）	10
写真3 遺物拓本作業	6	写真18 2トレンチ西側壁面基盤層（東側から）	10
写真4 3D モデル作成作業	6	写真19 北区重機掘削・人力掘削状況	11
写真5 デジタルトレース作業	6	写真20 北区重機掘削・人力掘削状況	11
写真6 DTP 編集作業	6	写真21 北区北壁写真測量状況	12
写真7 掘削前の状況1（北西側から）	9	写真22 北区SD01 南北ベルト設置状況	12
写真8 掘削前の状況2（北西側から）	9	写真23 北区SD01 掘削・実測状況	12
写真9 1トレンチ重機掘削（東側から）	9	写真24 北区SD01 掘削・実測状況	12
写真10 2トレンチ重機掘削（南側から）	9	写真25 北区SD01 掘削・実測状況	12
写真11 1トレンチ完掘状況（東側から）	10	写真26 南区重機掘削・人力掘削状況	13
写真12 1トレンチ北側壁面の状況（南側から）	10	写真27 南区測量作業状況	13
写真13 2トレンチ完掘状況1（南側から）	10	写真28 南区測量作業状況	13
写真14 2トレンチ完掘状況2（南側から）	10	写真29 西区重機掘削・人力掘削状況	13
写真15 2トレンチ西側壁面の状況（東側から）	10	写真30 埋め戻し完了状況	13

図 版 目 次

図版1 遺構1		図版3 遺構3	
1. 北区SD01 確認状況（南から）		8. 南区完掘状況（北から）	
2. 北区SD01 完掘状況（南から）		9. 南区完掘状況（南から）	
図版2 遺構2		10. 南区完掘状況（西から）	
3. 北区北壁土層断面（南から）		11. 西区完掘状況（南から）	
4. 北区東壁土層断面（西から）		12. 西区完掘状況（南から）	
5. 北区SD01 完掘状況（東から）	図版4 遺物1		
6. 北区SD01 土層断面（西から）	図版5 遺物2		
7. 北区SD01 東壁土層断面（西から）	図版6 遺物3		

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1節 遺跡の位置

名古屋市の中心部の熱田台地は、約6万年前の洪積世後期に形成され、河川の浸食等により開析を受けている。台地の北西端には名古屋城が、南西域には熱田神宮が位置し、西端は名古屋城築城に際して開削された堀川が流れ、その西には沖積平野が広がる。富士見町遺跡は台地東縁の標高5～10mに立地し、遺跡の東側は大曾根扇と呼ばれる谷地形を呈する。遺跡の範囲は南北約700m、東西約200mと推定されている。これまでに13地点の発掘調査が教育委員会及び民間調査機関によって実施された。調査の結果、弥生時代末頃から古墳時代初期頃の方形周溝墓や奈良から平安時代の竪穴建物跡等が確認され、縄文時代中期～晚期の縄文土器や石器、弥生時代中期～後期の土器、古代から中世の須恵器・陶器が出土した。

第2節 周辺の遺跡

旧石器時代

約3万年前に名古屋市内において人為的活動が確認されるが、当該期の遺構はいまのところ発見されていない。遺物は竪三蔵通遺跡（28）ではナイフ形石器や石刃が、旧紫川遺跡（27）では細石刃が出土している。そのほか玉ノ井遺跡（30）からは角錐状石器が、金山北遺跡（32）からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代

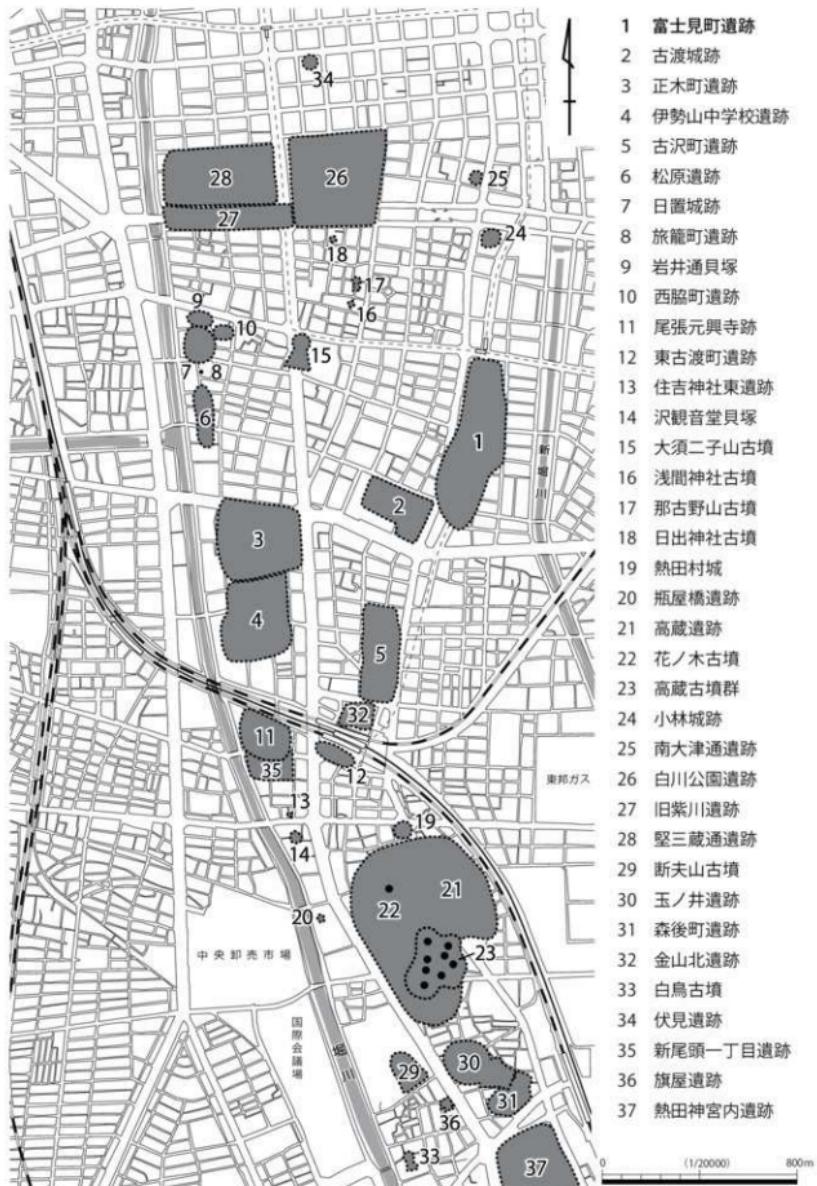
草創期については当該期の遺構は確認されていないが、当該期の遺物が竪三蔵通遺跡から出土しており、その他縄文中期から晩期にかけての土器が出土している。金山北遺跡からは後期初頭の土器が出土している。人為的活動が顕著に認められるのは晩期以降である。当該期の遺跡として富士見町遺跡（1）・古沢町遺跡（5）・岩井通貝塚（9）・東古渡町遺跡（12）・沢観音堂貝塚（14）・玉ノ井遺跡などがある。玉ノ井遺跡からは晩期前半の竪穴建物、墓域とそれに伴う人骨が確認されており、古沢町遺跡は尾張地方における縄文終末期の代表的遺跡の一つで溝状遺構や貝層が確認され、土器、石器、骨角器などが出土している。

弥生時代

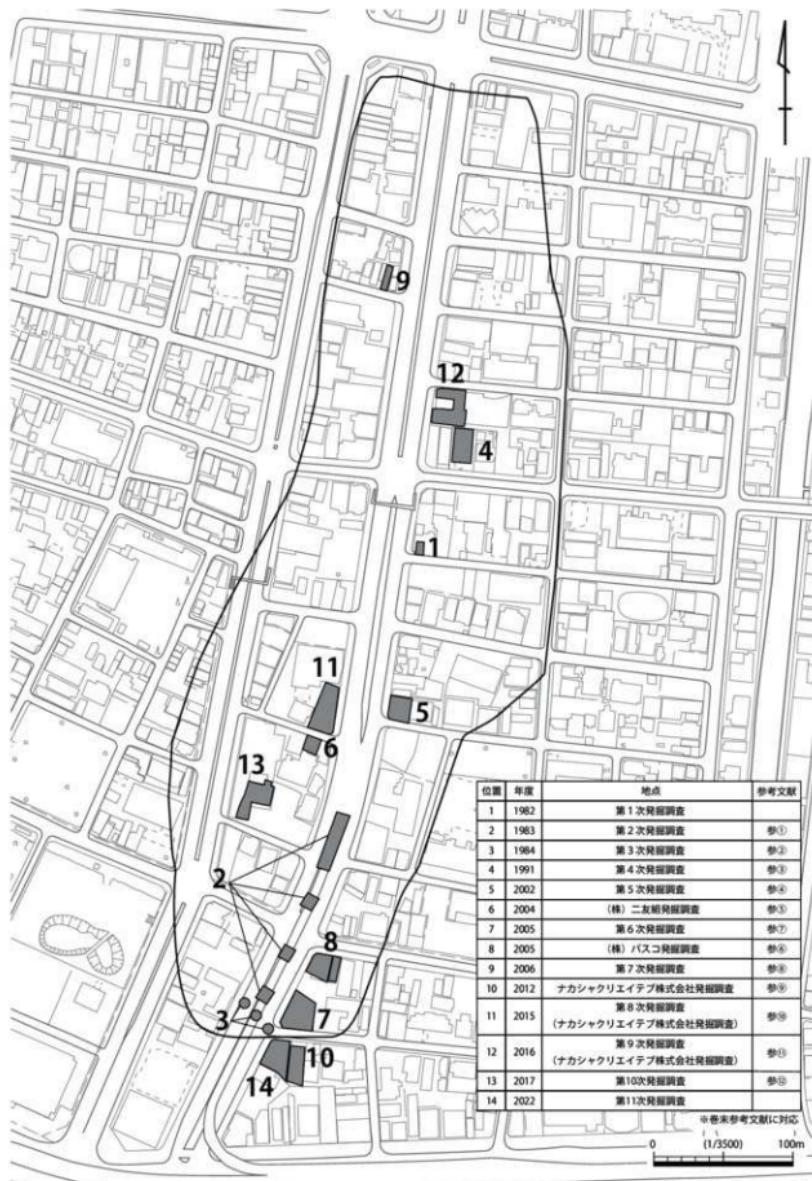
高藏遺跡（21）は東西約600m、南北約800mに及ぶ環濠集落跡で、弥生時代前期の土器が大量に発見されており、中後期に至るまで活動の痕跡が認められる。中期以降には、高藏遺跡を中心に富士見町遺跡・正木町遺跡（3）・古沢町遺跡など熱田台地上に集落が広がっていく。正木町遺跡では中期後半の方形周溝墓と推定される溝や貝層が確認されている。後期では金山北遺跡では方形周溝墓が、近接する東古渡町遺跡では竪穴建物や方形周溝墓が確認されている。高藏遺跡では四隅に陸橋部を持つタイプの方形周溝墓が確認されている。

古墳時代

前代に引き続いて高藏遺跡では継続的に活動が認められる。中期以降になると金山北遺跡・伊勢山中学校遺跡（4）・正木町遺跡・古沢町遺跡において大規模な集落が展開する。伊勢山中学校遺跡では多数の竪穴建物とともに鉄製品や初期須恵器、滑石製白玉が、金山北遺跡では、竈を持つ竪穴建物や初期須恵器



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 富士見町遺跡既往調査区位置図

が出土している。熱田台地上では、庄内川流域にやや遅れて中期に前方後円墳と推定される那古野山古墳（17）・大須二子山古墳（15）が出現する。後期になると熱田台地には首長墓群が形成される。まず、熱田台地先端に断夫山古墳（29）が築造され、その周辺には前方後円墳の白鳥古墳（33）や初期群集墳である高蔵古墳群（23）が築かれる。断夫山古墳は、のちに尾張國造を輩出し、「尾張氏」の中核を担うこととなる一族の首長（尾張連草香）の墓と考えられている。後期では東古渡町遺跡で方墳群が築造される。

古代

熱田台地上には、7世紀中頃に東海地方最古の寺院とされる尾張元興寺跡（11）に願興寺が建立される。伽藍に関連した遺構は確認されていないが多量の古代瓦や水煙が出土していることなど古代寺院の存在を証明しうる遺物が出土している。そのほか、正木町遺跡からは倉庫群と思われる総柱建物跡が確認され、羊形硯などが出土していることから、愛智郡衙の存在が推定されている。東古渡町遺跡からは7世紀後半から9世紀初頭の竪穴建物が確認され、建物内から布目を有する丸瓦が出土していることから尾張元興寺跡との関連が推定されている。

中世

正木町遺跡・古沢町遺跡・金山北遺跡・東古渡町遺跡・高蔵遺跡・富士見町遺跡などでは中世に至っても集落が継続する。古沢町遺跡・伊勢山中学校遺跡6次調査地点では鎌倉時代の館跡、伊勢山中学校遺跡4次調査地点では、室町時代から戦国時代の館群跡が発見されている。1534（天文3）年、織田信秀によって三河攻略の拠点である古渡城跡（2）が築城される。そのほか、日置城跡（7）・小林城跡（24）など城館が多く点在し、尾張と隣国との緊張関係を反映している様相が見られる。（永井）

近世

熱田台地では1690（元禄3）年に古渡城の跡地が徳川光友によって東本願寺に寄進され、1702（元禄15）年に真宗大谷派名古屋別院本堂が建立される。富士見町遺跡周辺は不二見ヶ原と呼ばれ、開発が行われていなかったが、1732（享保17）年に徳川宗春によって不二見ヶ原遊郭が開設されたことにより町並みの整備が進められた。（久富）

参考文献

- 大杉規之・大西美那 2012 『正木町遺跡』 東建コーポレーション
樋田泰之 2017 『尾張元興寺跡第16次発掘調査報告書』 ナカシャクリエイティブ株式会社
丹生泰雪・岡安光彦 2018 『尾張元興寺第17次発掘調査報告書』 株式会社島田組
片桐妃奈子 2021 『埋蔵文化財調査報告書90 古渡城跡（第2次）名古屋市文化財調査報告書107』
名古屋市教育委員会
安田幸市・飯塚邦男ほか 2004 『金山北遺跡第一次発掘調査報告書』
名古屋市住宅都市局・財団法人名古屋市都市整備公社
田中一廣・伊藤敬太郎ほか 2004 『金山北遺跡 金山北地区開発事業に伴う第2次発掘調査報告書』
国際航業株式会社

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

本調査は、エスリード株式会社（以下、事業者）が名古屋市中区大井町 301 番、324 番に計画した集合住宅の建設事業によるものである。事業地は富士見町遺跡に該当しており、2022（令和4）年7月27日に事業者が試掘調査依頼書を名古屋市教育委員会（以下、教育委員会）に提出した。教育委員会では、8月3日に試掘調査を実施し、遺物包含層である黒褐色の粘質土を確認した。包含層からは近世の遺物が出土した。

8月2日に文化財保護法（以下、同法）第93条第1項に基づく届出を、地中障害物撤去工事と新築工事の2件に分けて教育委員会に提出した。地中障害物撤去工事については9月20日付4教文第2-200号で工事立会、新築工事については10月6日付4教文第2-222号で発掘調査を指示した。10月12日、地中障害物撤去に伴って工事立会を実施し、掘削が遺物包含層まで及んでいないことを教育委員会立ち会いのもと確認した。

発掘調査については事業者、安西工業株式会社、教育委員会の三者において協定を締結、同法第92条第1項に基づく届出を愛知県県民文化局に提出した。10月20日付4 文芸第1666号にて受理通知を受け、2022（令和4）年10月24日より調査を開始した。（林）

第2節 調査の体制

試掘調査は名古屋市教育委員会が主体となり、調査を実施した。

本発掘調査は安西工業株式会社が主体となり、発掘調査及び整理作業を実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査指導 名古屋市教育委員会

監督員 林 順

調査主体 安西工業株式会社

事務局

工事第1部部長	渋谷 誠	文化財調査部部長	前谷宏明
次長	柳 孝浩	課長	久富正登
所長	谷本裕一	係長	入江剛弘
課員	鈴木敏雄	主任	新山王諒太
工事第2部部長	小山博通	課員	永井信弘
課長	山本 訓	課員	岩本めぐみ 吉盛莉世 宮原みゆき

発掘調査担当

調査員 永井信弘

調査補助員 鈴木淳子

重機運転手 長尾 潤

作業員 木村誠伸 高奥正堯 島 哲司 平井翔也 田前圭史 吉村 円 栗巣傳視
森川天照

整理調査担当

調査員 永井信弘 久富正登

調査補助員 岩本めぐみ 吉盛莉世 宮原みゆき 豊田礼子 辻本雅子 斎藤友富哉

藤本裕亘 新谷嘉海

(永井)



写真1 遺物洗浄作業



写真2 接合復元作業



写真3 遺物拓本作業



写真4 3Dモデル作成作業



写真5 デジタルトレース作業

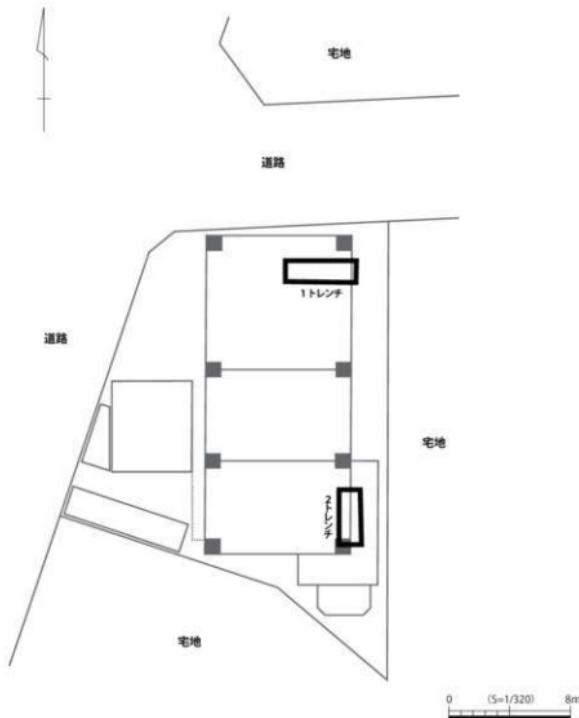


写真6 DTP編集作業

第3章 試掘調査

第1節 調査方法

調査は2022（令和4）年8月3日に実施した。現地の状況と工事計画を考慮し、1.4m×3.5m、1.4m×3.5mのトレンチを2カ所設定して調査を行った。現状地盤ならびに遺物包含層よりも上面に堆積する地層を重機で掘削した後、遺物包含層を人力によって掘削、遺構面を露出させた。その後は、断面精査を行い、必要に応じて写真撮影や実測図の作成などを実施した。



第3図 試掘調査トレンチ配置図

第2節 調査成果

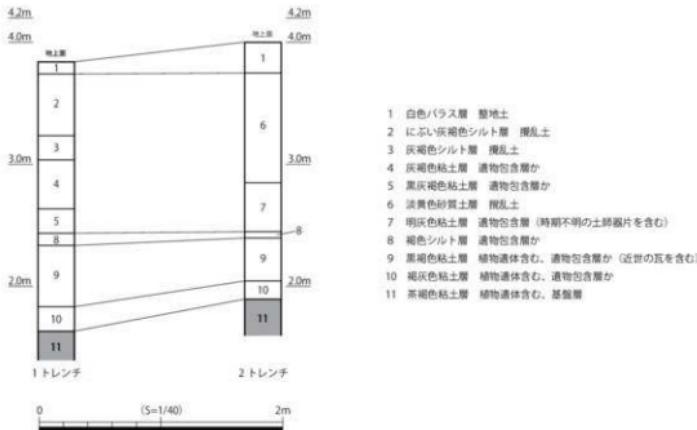
1トレンチの基本層序は、上層から白色パラス層（整地土）・にぶい灰褐色シルト層（攪乱土）・灰褐色シルト層（攪乱土）・灰褐色粘土層（遺物包含層か）・黒灰褐色粘土層（遺物包含層か）・褐色シルト層（遺物包含層か）・黒褐色粘土層（植物遺体含む、遺物包含層、近世の瓦片を含む）・褐灰色粘土層（植物遺体含む、遺物包含層か）・茶褐色粘土層（植物遺体含む、基盤層）である。

2トレンチの基本層序は、白色パラス層（整地土）・淡黄色砂質土層（攪乱土）・明灰色粘土層（遺物包含層、時期不明の土師器片を含む）・褐色シルト層（遺物包含層か）・黒褐色粘土層（植物遺体含む、遺物包含層か）・褐灰色粘土層（植物遺体含む、遺物包含層か）・茶褐色粘土層（植物遺体含む、基盤層）である。

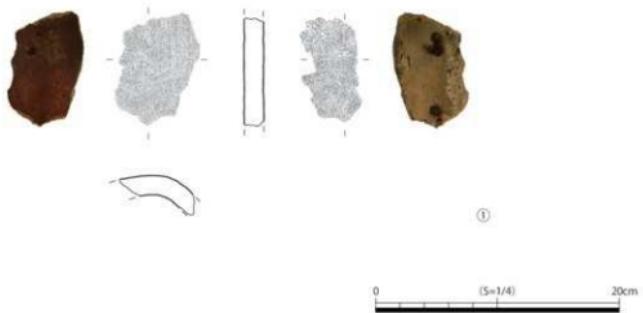
試掘調査の結果、明確に遺物が出土した層は1トレンチの黒褐色粘土層（地表面から150～200cm）、および2トレンチの明灰色粘土層（地表面から115～155cm）のみであったが、1・2トレンチともに遺物包含層とみられる黒みがかった粘質土が所在し、敷地内全体に遺跡が残存している状況が確認された。

（林）

第5図①は近世棧瓦片である。凹凸面ともにタテ削りのちナデ消し調整である。焼成は良好で凹面はにぶい黄橙色で、凸面はにぶい赤褐色を呈する。3mm以下砂粒を多く含む胎土である。（齊藤）



第4図 基本層序模式図



第5図 出土遺物実測図1



写真7 挖削前の状況1（北西側から）



写真8 挖削前の状況2（北西側から）



写真9 1 トレンチ重機掘削（東側から）



写真10 2 トレンチ重機掘削（南側から）



写真 11 1トレンチ完掘状況（東側から）



写真 12 1トレンチ北側壁面の状況（南側から）



写真 13 2トレンチ完掘状況1（南側から）



写真 14 2トレンチ完掘状況2（南側から）



写真 15 2トレンチ西側壁面の状況（東側から）



写真 16 2トレンチ東側壁面の状況（西側から）



写真 17 2トレンチ西側壁面最下層付近（東側から）



写真 18 2トレンチ西側壁面基盤層（東側から）

第4章 発掘調査

第1節 調査の方法

発掘作業に先立ち、重機を用いてアスファルトを除去し、その後、表土除去を行った。掘削深度の影響による土の崩落を防ぐため、調査区設定の際は隣接地から約1m以上の距離を保ち、掘削時は安全勾配の法面を設けるなど安全対策を行った。調査地の平面形はT字状を呈しており、南北約20m×東西約9mの長方形の調査区の西に東西約6.5m×南北約6.5mmの正方形の調査区が接し、調査面積220m²である。

地区割については、南北に長い調査区の北半分を北区、南半分を南区、隣接する西の調査区を西区とした。掘削土の借り置き場確保の為、調査は北区、南区、西区の順に実施した。

調査は、現状地盤ならびに遺物包含層よりも上面に堆積する地層を重機で掘削した後、遺物包含層を人力によって掘削、遺構面を露出させた。その後は、遺構確認及び断面精査、遺構掘削を行い、必要に応じて写真撮影や実測図の作成などを実施し、記録保存に必要なデータを取得した。(永井)

第2節 調査の経過

2022（令和4）年

10月24日（月）

北区重機掘削作業、北壁・東壁断面精査作業実施。擾乱坑（K1）から近現代瓦・染付磁器碗出土。

10月25日（火）

北区重機掘削作業、北壁・東壁断面精査作業実施。名古屋市教育委員会と現地で協議の結果、調査地北区の北端については重機バケット幅で東西に断ち割りを実施して地山面を確認することとした。断ち割りの結果、北壁で断面が西方向に落ちていく土層を確認した。上層から土師器ないしは弥生土器細片が出土した。東壁4層から近現代瓦・染付磁器碗、北壁14層から近代陶器皿、SD01上層から土師器細片が出土した。



第6図 調査地区割図



写真19 北区重機掘削・人力掘削状況



写真20 北区重機掘削・人力掘削状況

10月 26日（水）

北区重機掘削作業完了。北壁・東壁断面精査作業及び遺構確認作業実施。

北壁で断面が西方向に落ちていく土層は、断ち割り南側断面で溝状の土層になることを確認した。上層から土師器細片が出土した。基準点及び水準点設置後、北壁・東壁写真測量及び調査区の空中写真測量実施。

SDO1 上層から土師器細片・須恵器甕、東壁2層から近代瓦・陶器鉢、攢乱坑（K1）から近現代瓦・染付磁器碗出土。

10月 27日（木）

午前中、教育委員会による現地確認を受ける。

SDO1 確認作業及び写真撮影のための清掃作業終了後、北区北壁及び SDO1 確認状況写真撮影実施。SDO1 の南北ベルト設定後、ベルト東側掘り下げ作業実施。午後4時過ぎ、教育委員会による現地確認。近世の遺構については平面では確認できなかったので、土層断面の遺物を採集することによって、土層の時期を明確にするということで了解を得た。

SDO1 上層から古墳時代～中世の土師器、中層から奈良時代の平瓦・中世の土師器、下層から中世の土師器・山茶碗が出土した。

10月 28日（金）

北区 SDO1 の南北ベルト西側掘り下げ作業実施。SDO1 は調査区西壁付近で直角に南方向に曲がることが判明した。

SDO1 上層及び中層から中世の土師器・平瓦・陶器・山茶碗が出土した。

10月 29日（土）

北区 SDO1 の南北ベルト西側掘り下げ作業実施。南北ベルト西面写真撮影、土層断面図実測後撤去作業実施。東壁 SDO1 土層断面図及び溝平面図実測実施。SDO1 中層から古墳時代～中世の土師器・須恵器・陶器が、下層から中世の土師器・陶器が、攢乱坑（K1）から奈良時代の須恵器杯が出土した。

10月 30日（日）

北区土層の土層注記作業実施。

北壁断面6層から陶器、7層から中世の平瓦、17層から中世の土師器・陶器が出土した。



写真21 北区北壁写真測量状況



写真22 北区 SDO1 南北ベルト設置状況



写真23 北区 SDO1 掘削・実測状況



写真24 北区 SDO1 掘削・実測状況



写真25 北区 SDO1 掘削・実測状況

10月31日（月）

教育委員会による北区調査完了確認を受ける。北区写真撮影のための清掃作業実施。調査地全景・SDO1・東壁土層断面写真撮影実施。

SDO1 南北ベルト下層から中世の土師器が出土した。写真撮影実施後、埋め戻し作業実施。

11月2日（水）

南区重機掘削実施。人力による断面精査及び遺構確認作業実施。

4層及び搅乱坑（K2）から近現代瓦・染付磁器碗出土。

11月3日（木）

南区人力による断面精査及び遺構確認作業実施。東壁40層から中世の山茶碗が、搅乱坑（K1・2・3）から近現代瓦・染付磁器碗出土。

11月4日（金）

教育委員会による南区調査完了確認を受ける。

南区空中写真測量及び調査地全景及び土層断面測量作業写真撮影実施後、重機による埋め戻し作業開始、同日完了。

11月7日（月）

教育委員会による南区埋め戻し完了確認を受ける。西区重機掘削開始・完了。人力による断面精査作業。調査区全体がガソリンタンク設置時に搅乱されていることが判明。

トータルステーションによる遺構平面図作成及び手実測により北壁土層断面図作成。

11月8日（火）

西区人力による土層断面・平面清掃作業後写真撮影実施後、重機による埋め戻し作業実施・完了。

教育委員会による西区埋め戻し完了確認を受ける。

(永井)



写真 26 南区重機掘削・人力掘削状況



写真 27 南区測量作業状況



写真 28 南区測量作業状況



写真 29 西区重機掘削・人力掘削状況



写真 30 埋め戻し完了状況

第3節 調査の成果

1. 基本層序

調査地の基本層序は、上層から碎石セメント改良土（1層）・黒褐色瓦礫混じり土（2層）・黒褐色粘土（7層）・オリーブ黒色粘土（11層）・黒色粘土（17層）・黒褐色粘質土（40層）・黄褐色砂質粘土（18層）及び黄褐色砂質シルト（27層）・黒色シルト（20層）及び黒色砂質シルト（42層）・黒褐色シルト（21層及び43層）・にぶい黄褐色シルト（52層 地山）となる。52層以下では熱田層の下層である灰白色砂質土がみられた。

1層・2層・7層・8層は、弥生土器・中世の平瓦・近現代の瓦・煉瓦・陶磁器を含む攪乱層である。11層で近世の陶器と思われる細片が出土したことや黒色粘土（15層）の上面で近世の土坑が掘り込まれていることから、15層の上面が近世の一時期の生活面であったと考えられる。18層や27層は近世の水田の床土と考えられる。17層からは中世の土師器細片、40層からは山茶碗（第9図-15）が出土するものの、これらの層は近世の水田の耕作土と考えられる。

20層・42層・21層及び43層は地山の直上に堆積するが、遺物は出土していない。調査地北区では23層に植物遺体が混じることから、この辺りはやや谷地形となり、湿地であったことがわかる。（永井）

2. 遺構

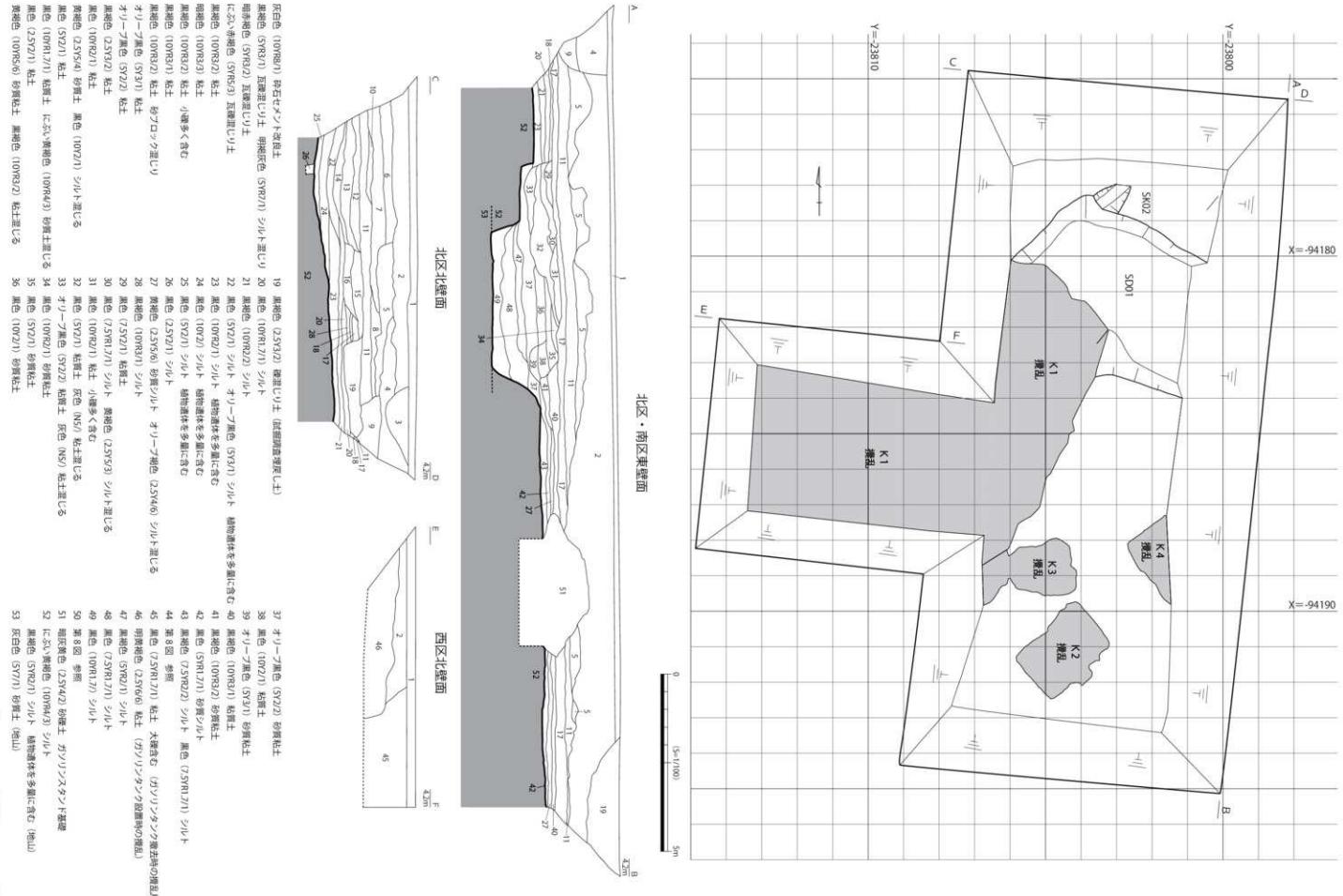
SD01（大溝）

調査地北区で確認された東西溝で、標高およそ3.0m、上面の幅約4m、深さ約0.9～1.1mを測る。断面形状は逆台形を呈す。南西側は攪乱によって損壊を受けるため不明瞭ではあるが、西端で屈曲して南側に延びる様相が認められる。埋土は、上層からオリーブ黒色砂質粘土（37層）・黒褐色シルト（47層）・中層として黒色シルト（48層）・下層として黒色シルト（49層）・黒褐色シルト（50層）が堆積する。溝埋土上層からは山茶碗・内耳鍋・平瓦片・中層から施釉陶器・須恵器脚部・平瓦片が、下層から土師質羽釜・円筒埴輪片・棧瓦片が出土した。遺物は小片が多く、全体の把握ができるものは少ない。下層から16世紀に比定される羽釜が数点と棧瓦片が、上層から15世紀後葉から16世紀前半に比定される内耳鍋が出土していることから、16世紀以降には溝が機能していた可能性が推定される。（永井）

SK02（土坑）

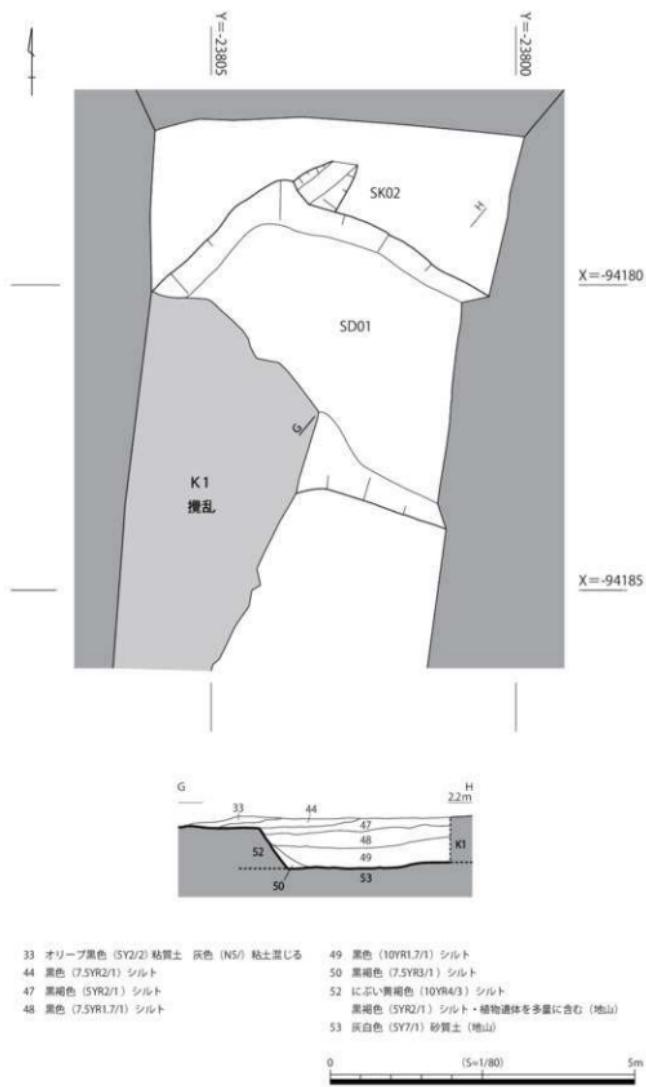
調査地北区で確認された遺構である。標高およそ3.0m、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ約0.15mを測る。断面形状は皿形を呈す。SD01の調査時に埋土の差異が不明瞭であったため、土層観察は行えなかった。北側の下端が不明瞭であることから溝状遺構の可能性も考えられるが、北壁面の土層観察からは対応する落ち込みは確認できなかった。

この他、東壁面と北壁面の土層観察から遺構の可能性がある落ち込みを確認している。東壁面の落ち込みはSD01の埋没後にやや北寄りの位置に開削されている。近世の水田床土と推定される黄褐色砂質粘土（18層）から掘り込まれており、埋土にブロック状の灰色粘土や黒褐色シルトが多く混入していることから人為的に埋められた可能性がある。北壁面の落ち込みは前述の落ち込みより上位層である黒色粘土（15層）から掘り込まれている。下層埋土にオリーブ色砂質土の堆積が見られることから、流水痕跡の可能性



第7図 遺構全体図及び土層断面図

が考えられる。この層から美濃産と推定される陶器片（第9図-14）が出土している。この二つの落ち込みは近世以降に帰属するものと推定される。（久富）



第8図 SD01 平面図及び土層断面図

3. 遺物

遺物は SD01 から出土したものと、壁面及び攪乱から出土したものに分けられる。1～11 と 17～20 は SD01 からの出土である。12～15 と 21 は壁面からの出土で、16 は攪乱から出土した。

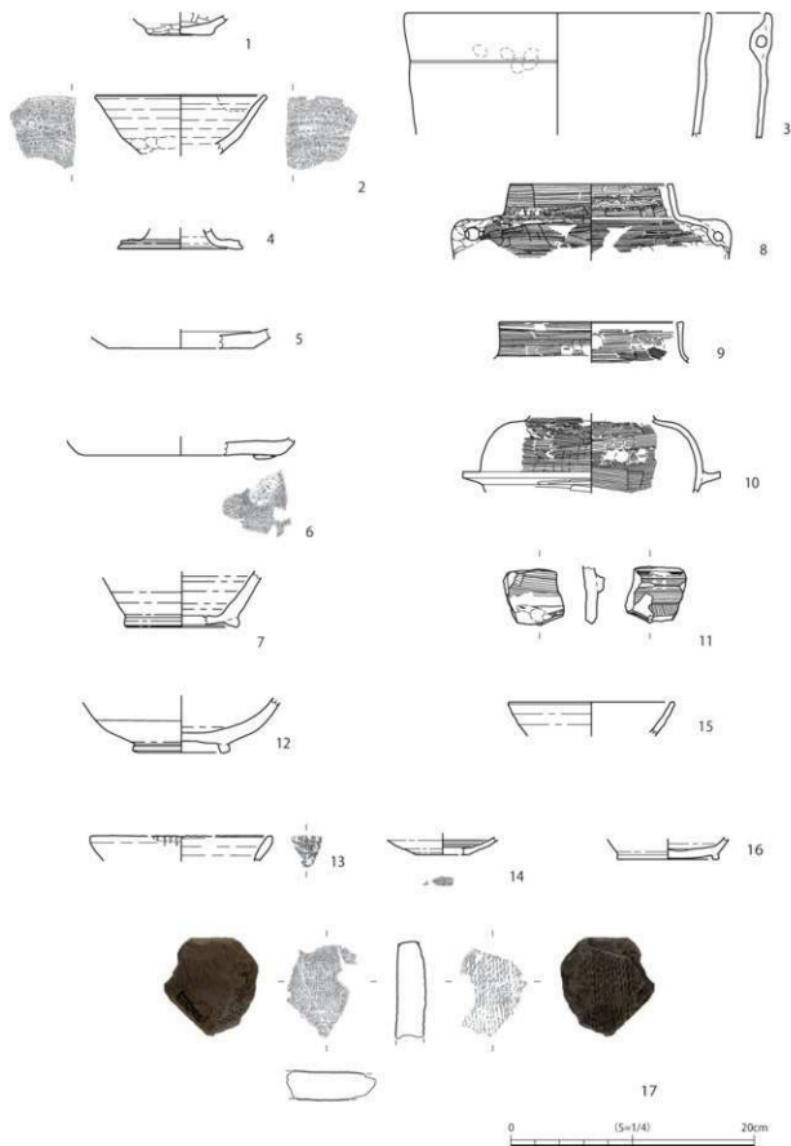
1 は弥生土器である。底部片であり、平底の壺あるいは甕と推測される。内外面ともにナデ調整である。焼成は良好で胎土は 1 mm 以下の砂粒を多く含む。摩耗が著しい。2 は尾張型山茶碗で、小片である。胎土が粗く、内面の一部に自然釉が付着する。回転ナデ後、体部下側を指ナデ調整で仕上げている。14世紀頃の尾張 8 型式（注1）と推定される。3 は土師質内耳鍋である。体部から口縁部にかけての破片で、底部形状は不明である。内彎形内耳鍋の特徴を持つ。器壁は薄手で直線的な体部を持ち、口縁部はわずかに彎曲しながら直立する。体部外面は指オサエまたは指ナデ調整で、内面は平坦・平滑に仕上げられている。口縁端部をやや強くナデしており、口縁部断面形は方形を呈する。体部外面上方には浅い沈線を一条施している。内耳は口縁端部のやや下がった部位に、半球状の粘土を平たく取り付け、器壁を外に押し出しつつ棒状工具を用いて穴を貫通させている。尾張内耳鍋 A 類（注2）と推定される。4 は須恵器高环の脚部片である。裾広がりの形状で、脚の端部は外側に凹面を持ち、段がつく。下段は上段に比べて厚みがあり、突出した形状で一条の沈線が巡る。内外面ともにナデ調整である。灰白色の胎土で、1 mm 以下の長石や石英を多く含む。焼成は良好である。細片のため窯式などは不明確である。

5～7 は施釉陶器である。いずれも瀬戸美濃産と推定される。5 は底部片で、残存不良のため器種は不明である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部には糸切痕がある。焼成は良好で 2 mm 以下の砂粒を微量に含む胎土である。内面にのみ光沢のない赤褐色の釉が施されている。6 は底部片で、器種は皿である。調整は内外面ともにナデで、底部には糸切痕がある。焼成は良好で、胎土は緻密である。内外面ともに淡い緑色の灰釉を施してあるが、破断面にも釉薬の付着がみられる。底部には焼成時における別個体もしくは窯道具との癒着がみられる。7 は底部片で、器種は高台付碗である。内外面ともに調整は回転ナデで、底部に高台が張り付く。張り付けられた高台は豊付部分が平行でなく、中心に向かって傾斜するため、断面形は三角形を呈する。焼成は良好で胎土は密である。内面には底部を中心に灰釉の飛沫があり、外面では部分的に釉薬が付着する。時期については小片であることから不明確である。

8 は土師器羽釜と推定される破片である。口縁部は直立し、外耳が付く形状が辛うじて確認でき、鈔を有するかどうかは不明である。肩部の張り出しあは控えめで、ややなで肩の形状である。口縁部の断面形は方形で、器壁の厚さは口縁部と体部ではほぼ同じ厚さである。肩部に付く外耳は粘土紐を縦位に貼付し、棒状工具で穴を貫通させており、外耳を取り付ける際には器壁を内側に相当押し出している。内面の調整は指オサエとナデ、外側の口縁部はナデ調整で、外側体部の調整はヘラナデと指オサエである。羽釜であるのならば尾張羽釜 A2 類（注2）に相当すると思われる。

9～10 は土師質羽釜である。いずれも破片である。9 は口縁部から体部との境界部分までの破片である。器壁の厚みは薄く、口縁端部をナデしており断面形は方形に近い。内外面はヨコナデ調整がされており、一部で指オサエがみられる。10 は口縁部を欠き、肩部から鈔にかけての破片である。器壁の厚みは薄く、体部はわずかに肩を張る。

鈔端部の断面形は台形状で、上辺に対して下辺が長く、上を向いた斜面となっている。内面はハケ調整後に指オサエ、外面上部はヨコナデ調整後に指オサエで、鈔を境にして下部はヘラ磨き調整である。尾張



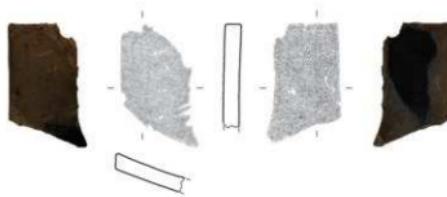
第9図 出土遺物実測図 2

羽釜C類（注2）に相当すると思われる。

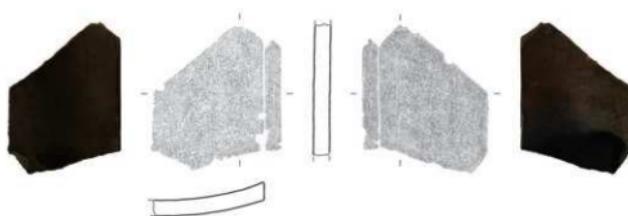
11は円筒埴輪である。突帯部の破片であり、透かし穴の一部が確認できる。外面には縦方向と横方向の刷毛目がみられ、縦方向の刷毛目の後に横方向の刷毛目を施している。内面には右下がりの刷毛目が残る。張り付けられた突帯の断面形は上部が凹んだ台形で、高さは0.6cm程で、基部幅がおよそ1.5cmで約1cm幅の面をつくりだしている。色調は橙であり、焼成は良好である。12は施釉陶器である。底部片で、器種は高台付碗である。内外面ともにナデ調整で、高台が貼り付けられており、高台裏には指圧痕がある。焼成は良好で胎土は1mm以下の砂粒が多く含む。浅黄色の釉をツケガケしている。内面の見込みには目痕が残る。13は弥生土器片である。焼成はやや軟質で、外面は明褐灰色で内面はにぶい橙色であり、胎土には2mm程の砂粒を含む。調整はナデで、口縁部外面には細い刻み目を施してある。14は施釉陶器である。体部下側から底部にかけての破片で、器種は皿である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部には糸切痕が残る。焼成は良好で1mm以下の長石を微量に含む胎土である。15は東濃型山茶碗の口縁部である。粒子が緻密で均一な胎土で、内面に自然釉の飛沫がある。全体を回転ナデで仕上げ、口縁端部はやや丸く收めている。15世紀頃の東濃10型式（注1）と推定される。16は須恵器底部片で壺と推定される。底部には回転糸切の痕が残り、貼り付けられた高台は疊付部分を滑らかに仕上げている。内外面ともにナデ調整である。褐灰色の胎土で、1mm以下の砂粒を微量に含む。焼成は良好である。

17～21は瓦であるが、完形のものはなくすべて破片である。17は古代平瓦である。凸面には細長くやや間延びした斜格子叩き目、凹面はヘラ削り調整で布目痕が残る。側面はヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で凹凸面ともに灰白色を呈する。2mm以下の微砂粒を多く含む胎土である。18は平瓦である。凹凸面ともに削りのちナデ調整で、側面はヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で凹凸面ともににぶい黄色を呈する。2mm以下の微砂粒を多く含み、3mm程の砂粒を少量含む胎土である。凹凸両面で黒斑が部分的にみられる。19は平瓦である。凹凸面ともにタテ削りのちナデ消し調整で、側面はヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で凹凸面ともににぶい黄橙色を呈する。2mm以下の微砂粒をやや多く含む胎土である。凸面で黒斑が部分的にみられる。20は棟瓦である。凹凸面ともに削りのちナデ調整で、側面はヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で凹凸面ともに灰黄色を呈する。2mm以下の微砂粒を多く含み、3mm程の砂粒を微量に含む胎土である。凹凸両面で黒斑が部分的にみられる。21は平瓦である。凹凸面ともにタテ削りのちナデ消し調整で、側面はヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で凹面は灰黄色、凸面はにぶい黄橙色を呈する。2～3mm程の砂粒を多く含む胎土で、金雲母も多く含んでいる。

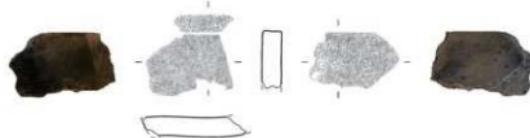
そのほか攪乱2（K2）からは近代以降の陶磁器が出土している。22は陶製の徳利、23は土師質火鉢、24は施釉陶器の鉢で、黄色の釉薬を施す。25～35は磁器である。25・31は徳利、26は湯呑、29は小壺、30は瓶子、28と35は茶碗、27・32～34は皿である。（齋藤）



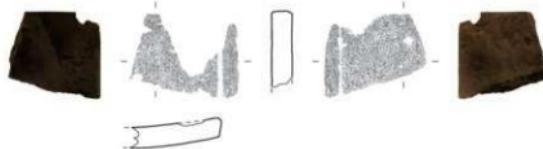
18



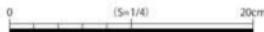
19



20



21



第10図 出土遺物実測図3

辨別番号	遺物番号	地区・遺構・層位	種類・器形	法則 (□は元性), 器高H 残存高には既)		色調	敷土	焼成	残存率	備考
				底径	残5.0 残H1.6					
9	1	北区 SD01 上層	弔生土器	底径 残5.0 残H1.6	内面 10YR5/1 黄褐色 外面 7.5VR6/3 に赤褐色	φ 1mm以下の砂粒を多く含む	良好	底部	10%	
9	2	北区 SD01 南北ベルト西 上層	山茶碗 磁	口径 残13.6 残H4.8	内・外面 10YR7/1 黄白色	φ 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	口縁部 10%	内面自然釉	
9	3	北区 SD01 南北ベルト西 上層	土師質 内瓦鍋	口径 残24.3 残H10.3	内面 10YR7/2 に赤褐色 外面 7.5YR2/1 黒色	φ 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	口縁部 15%		
9	4	北区 SD01 南北ベルト中層	須恵器 高杯	底径 残10.2 残H1.7	内面 10YR7/1 黄白色 外面 2.5Y7/1 黄白色	φ 1mm以下の長石、石英を多く含む	良好	底部 10%		
9	5	北区 SD01 南北ベルト西 中層	陶器 不明	底径 残12.0 残H1.6	内面 5YR5/4 に赤褐色 外面 2.5Y8/2 黄白色	φ 2mm以下の砂粒を微量に含む	良好	底部 10%	底部赤切り版あり 瀬戸美濃か	
9	6	北区 SD01 南北ベルト東 中層	陶器 盆	底径 残16.0 残H1.5	内面 10Y7/2 黄白色 外面 7.5Y7/2 黄白色	適密	良好	底部 10%	底部赤切り版あり 内外共に縫隙あり 瀬戸美濃か	
9	7	北区 SD01 南北ベルト下層	陶器 瓢	底径 残9.0 残H4.6	内面 10YR7/1 黄白色 外面 2.5Y7/1 黄白色	密	良好	底部 15%	高台 瀬戸美濃か	
9	8	北区 SD01 南北ベルト東 下層	土師器 羽釜	口径 残13.4 残H6.3	内面 10YR6/2 に黄褐色 外面 10Y4/1 黄褐色	φ 2cm大の砂粒を多く含む	良好	口縁部 10%		
9	9	北区 SD01 南北ベルト下層	土師質 弓道	口径 残15.0 残H3.3	内面 10YR4/1 黄褐色 外面 7.5VR6/4 に赤褐色	φ 1mm以下の砂粒を多く含む	良好	口縁部 5%		
9	10	北区 SD01 南北ベルト西 下層	土師質 体鉢	底径 残18.2 残H6.3	内面 7.5YR7/2 明褐色 外面 7.5YR4/1 黄褐色	φ 2~3mm大の砂粒を微量に含む	良好	体部 10%	外側焦げ痕付着	
9	11	北区 SD01 南北ベルト下層	埴輪 円筒埴輪	底径 残4.7	内面 5YR3/3 に赤褐色 外面 5YR6/6 棕色	φ 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	全体 5%		
9	12	北区 東側断面 2階	陶器 盆	底径 残8.0 残H4.5	内面 2.5Y7/3 浅黄色 外面 2.5Y8/2 黄白色	φ 1mm以下の砂粒を多く含む	良好	底部 20%	内面目録あり ツケが強め	
9	13	北区 東側断面 8階	弔生土器 不明	口径 残15.0 残H2.1	内面 7.5YR7/3 に赤褐色 外面 7.5YR7/2 明褐色	φ 2mm大の砂粒含む	半不良 5%	口縁に裂み 弔生中期		
9	14	北区 古壁 14割	陶器 盆	底径 残4.4 残H1.4	内面 7.5YR8/3 浅褐色 外面 7.5YR7/2 明褐色	φ 1mm以下の長石を微量に含む	良好	底部 5%	底部赤切り版あり 瀬戸美濃か	
9	15	南区 東側断面 40削	山茶碗 磁	口径 残13.2 残H2.3	内・外面 2.5Y8/1 黄白色	φ 1mm以下の砂粒が微量含む	良好	口縁部 5%	自然釉 内面に付着 東造10型式	
9	16	北区 K1 (ガソリンタンク覆瓦)	須恵器 盆	底径 残8.3 残H1.8	内面 10YR6/1 黄褐色 外面 10YR5/1 黄褐色	φ 1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	底部 5%	高台	
9	17	北区 SD01 南北ベルト東 中層	瓦 平瓦	残存長7.5 残存幅6.3 厚さ2.2	内・外面 2.5Y8/1 黄白色	φ 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	全体 10%	凹面布目瓦 凸面タキ瓦	
10	18	北区 SD01 南北ベルト西 上層	瓦 平瓦	残存長8.8 残存幅4.3 厚さ1.3	内・外面 10YR7/3 に赤褐色	φ 2mm以下の砂粒を多く含む。 φ 3mm大の砂粒を少量含む	良好	全体 10%	黒瓦あり	
10	19	北区 SD01 南北ベルト西 中層	瓦 平瓦	残存長11.0 残存幅7.3 厚さ1.4	内面 10YR7/2 に赤褐色 外面 10YR6/3 に赤褐色	φ 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	全体 10%	外側黒膜あり	
10	20	北区 SD01 南北ベルト西 下層	瓦 栓瓦	残存長4.6 残存幅8.3 厚さ1.6	内・外面 2.5Y7/2 黄褐色	φ 3mm大の砂粒を微量に。 φ 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	全体 10%	黒瓦あり	
10	21	北区 北側断面 7階	瓦 平瓦	残存長6.1 残存幅7.3 厚さ1.7	内面 2.5Y7/2 黄褐色 外面 10YR7/3 に赤褐色	φ 2~3mm大の砂粒を多く含む 全表面を多く含む	良好	全体 10%	側縁端面取り	
5	①	試験調査	瓦 栓瓦	残存長6.9 残存幅6.9 厚さ1.6	内面 10YR6/3 に赤褐色 外面 5YR5/4 に赤褐色	φ 3mm以下の砂粒を微量に含む	良好	全体 10%		

第1表 遺物観察表

第5章 まとめ

第1節 遺物について

今回の調査では遺物コンテナ4箱分の遺物が出土した。近代の搅乱からの陶磁器類が主体を占め、遺構からの出土は少ない。SD01からは15世紀後葉から16世紀頃に比定される土師器内耳鍋A類や羽釜A類及びC類（注2）、14世紀に比定される尾張型山茶碗と15世紀に比定される東濃型山茶碗、近世と推定される瓦、弥生土器や円筒埴輪片が出土している。円筒埴輪は第1次調査と第10次調査においても出土している。出土遺物は弥生時代から近世と多岐にわたるが、古代以前の遺物は摩耗が著しく、同時期の遺構も確認されていないため台地上からの流入品と推測される。接する調査区でも同様の傾向が確認されている（注3）。

第2節 遺構について

今回の調査では16世紀に帰属する大溝（SD01）と近世・近代の土坑を確認した。SD01は幅4.0m、深さ1.00m以上と規模の大きい遺構である。断片的な確認であったが、いわゆる「堀」の可能性を考慮して周辺の調査事例を観察したところ、2012年度調査ではSD01の延長上に幅約2.4m、深さ0.8mの土坑（002SK）とやや軸を違える長さ4.8m、幅2.6m、深さ1.0mの長方形状の土坑（003SK）が確認されている（第11図）。報告では002SKは003SKに先行する風倒木の可能性が指摘されている（注4）。出土遺物から、よりSD01と年代が近いと推測される003SKを観察すると、幅はやや狭いものの深さは同様の規模を呈すことから関連性が推測されるが、SD01と同軸線上には位置せず、また土坑であることから、SD01に接続するとは断定できない。このことからSD01は003SKと同様の大型の土坑であった可能性も考えられる。SD01の性格については今後の調査の進展に期待したい。

第3節 既往調査と遺構の分布について

今回の調査は富士見町遺跡の中でも、最も南側に位置する。2012年度調査区（第12図-10）の西側に近接し、道路を挟んで第6次調査区（第12図-7）が位置する。これらの調査区の地盤標高は約3.8mと低地上に位置し、遺物包含層からは縄文時代～中世の遺物が出土しているが、当該期の遺構はほとんど確認されていない。前述した2012年度調査では中世と推定される土坑が確認されている（参⑨）。第6次調査では多数の近代の廃棄土坑と建物基礎と思われる丸太杭群が確認されている（参⑦）。第6次調査区から40m北に移動したところに2005年度調査区（第12図-8）が位置する。地盤標高は約5.0mと前述の調査区と比較するとやや高位ではあるものの低地に位置する。古代の遺構は確認できず、近世の溝状の一部（SD01）と井戸の可能性がある土坑（SK01）、近代の廃棄土坑（SX02）が確認されている。SD01は人為的に開削された池や沼の可能性が指摘されている。またSD01と近代の廃棄土坑であるSX02が同一面で確認されていることから、長期間堆積土の流入が発生せず土地が利用されていた可能性が指摘されている（参⑥）。

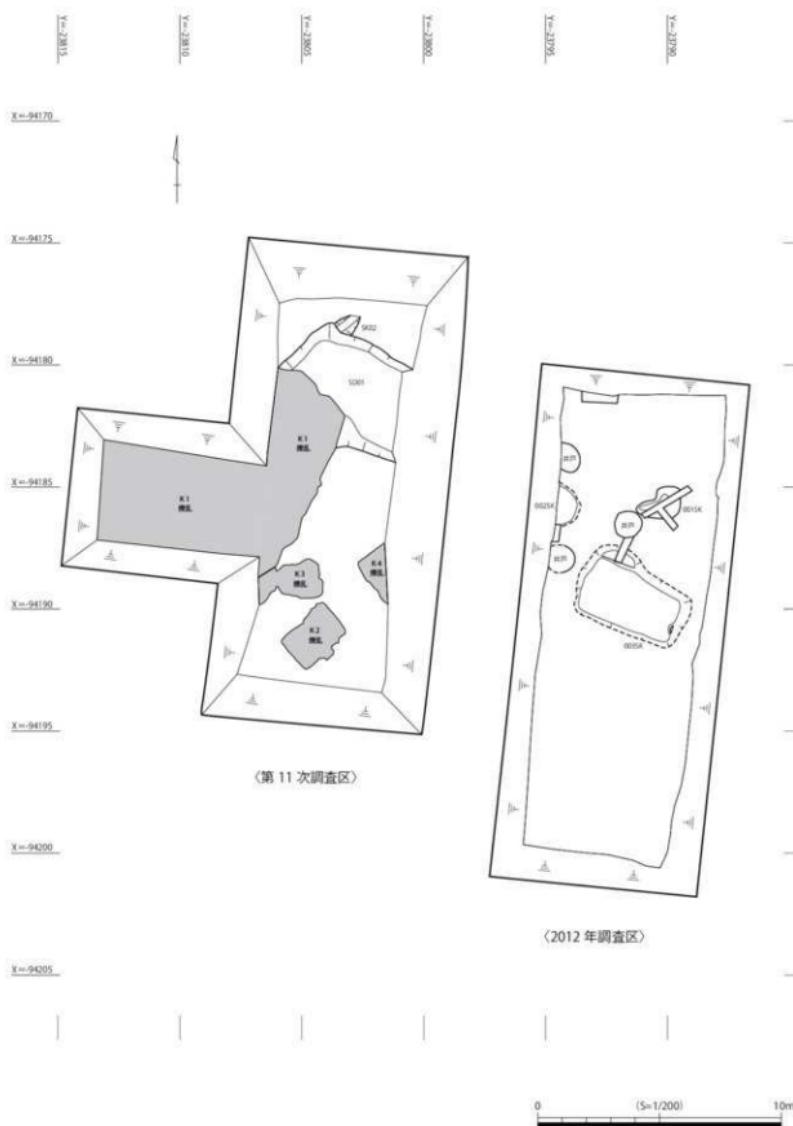
低地上の調査成果を簡潔にまとめると、遺物包含層は縄文時代から中世・近世の遺物で形成されているが、堆積の時期差なども明瞭では無いことから、台地上からの流入が主な形成要因と判断される。遺構は

古代に帰属するものは確認されず、16世紀頃からの遺構が認められるが、顕著な活動は近世以降となる。

次に台地上南側の既往調査についてみていただきたい。遺跡の南側に位置する第2次調査（第12図-2）では縄文時代～近世の遺物包含層と弥生時代～平安時代の遺構が確認されている。特にⅢ区は低地上の2005年度調査区、Ⅳ区は第6次調査区に近接しているが、低地上の調査とは確認遺構に明瞭な差異が認められる。報告書に図面が未掲載であることから正確な地盤標高は不明であるが、実地を踏査したところ現況ではあるが約2m前後の比高差が存在することから台地から低地に至る緩傾斜地に相当する（参①）。さらにその南側に位置する第3次調査（第12図-3）では遺構は確認されず、弥生～近世の遺物包含層が確認されているにすぎない（参②）。第2次調査Ⅰ区の40m西に移動したところに第10次調査区（第12図-13）、そこから40m北に移動したところに2003年度調査区（第12図-6）、道路を挟んで北側に第8次調査区（第12図-11）、そこから40m東に移動したところに第5次調査区（第12図-5）が位置する。現況の地盤標高は概ね10m以上で台地上に相当する。第10次調査では弥生時代中期末に帰属する方形周溝墓、弥生時代終末期に帰属する竪穴建物、古墳時代中期に帰属する方墳が確認されており、周溝埋土から円筒埴輪片が出土している。墓域から居住域となり、再度墓域へと変化する土地利用の変遷が確認されている（参③）。2003年度調査では弥生時代に帰属する竪穴建物と古墳時代に帰属する溝状遺構が確認されている。この溝状遺構は古墳周溝の可能性が指摘されている（参⑤）。第8次調査では弥生時代中期に帰属する方形周溝墓と古墳時代に帰属する緩やかに弧を描くような溝状遺構が確認されている。この溝状遺構は円墳の周溝の可能性が指摘されている。また、古代から中世の遺構は確認されていない（参⑩）。第5次調査では様相が異なり、近世の遺構が主体を占める他は古代に遡る可能性がある小穴が確認されているのみである。遺物も縄文から中世に至るものが出土しているが量は少なく、近世以降の開発に伴う流出や元から遺構が希薄であった可能性が指摘されている（参④）。

最後に台地上北側の既往調査をみていく。第5次調査区から100m北に移動したところに第1次調査区（第12図-1）が位置する。そこから60m北に移動すると、第4次調査区（第12図-4）が位置し、更に近接するよう第9次調査区（12）が位置する。第7次調査区（第12図-9）はそこから80m北西に移動したところにあたり、これまでの調査で最も北側に位置する。第1次調査では古墳時代に帰属する溝状遺構や平安時代に帰属する土坑が確認されている。弥生時代から中世に至る遺物が出土しているが、なかでも注目すべき遺物として円筒埴輪片の存在が認められる（参⑦）。第4次調査では弥生時代後期後に帰属する方形周溝墓、奈良時代～平安時代前期に帰属する古代の竪穴建物が複数確認されている。その他近世後半の町割りに関連する溝状遺構や礎石建物などが確認されているが、中世の遺構は確認されていない（参③）。第9次調査では弥生時代中後期に帰属する竪穴建物の他、13世紀の山茶碗を多く包含するL字状の平面形状を呈す溝状遺構が確認されており、区画溝もしくは中世城館の堀跡の可能性が指摘されている。その他、太平洋戦争時の防空壕が確認されている（参⑪）。第7次調査では弥生時代後期に帰属する方形周溝墓、奈良～平安時代前期に帰属する土坑などが確認されている。その他近世後半の廃棄土坑が多数確認されている（参⑧）。

以上が簡潔ではあるが既往調査の概要である。遺跡全体を俯瞰すると遺構の分布は散発的な印象が強い。これは遺跡範囲が市街地であることと既往の調査面積が小規模なものであることから、遺跡の全容についてはまだまだ不明な点が多いことが要因であろう。そのような状況でも台地上と低地上での遺構分布につ



第 11 図 周辺調査区合成図 1

いて僅かながら次のような傾向がうかがえる。

富士見町遺跡での顕著な活動の痕跡は弥生時代中期頃から認められる。台地上北側では竪穴建物が中期頃から出現し、後期後半から方形周溝墓が構築される。その後、古墳が構築され、奈良時代になると集落が形成される。集落は平安時代前期まで継続するものの、その後見られなくなる。中世の様相は不明瞭であるが、鎌倉時代になると区画溝もしくは堀跡の可能性がある溝状遺構が出現する。このことから小規模な遺構は近世以降の開発により消滅している可能性が高く、中世期の活動が存在しないことを示しているものではないであろう。台地上南側では弥生時代中期から後期の方形周溝墓が複数構築され、墓域が形成され、終末期には竪穴建物が出現する。その後北側と同じく古墳が構築され、方墳と円墳の可能性が指摘されている。両者の時期関係については不明であるが、方墳の周溝からは提瓶の他、中期と推定される円筒埴輪片が出土している。古代や中世の様相については掘立柱建物の可能性がある小穴群の他、平安時代の土坑などが確認されているものの、分布などについては不明瞭である。台地上北側と同じく近世以降の開発によって遺構が消滅しているものと推定される。最後に低地上の様相をみてみると台地上とは打って変わって、古代以前の遺構は確認されていない。僅かながら中世の遺構が確認されるが、近世以降の遺構が主体を占める。これは低地自体が遺跡範囲外であることから調査事例が少ないと、遺跡の分布状況からそもそも居住域としては選定されない環境であったためと推測される。

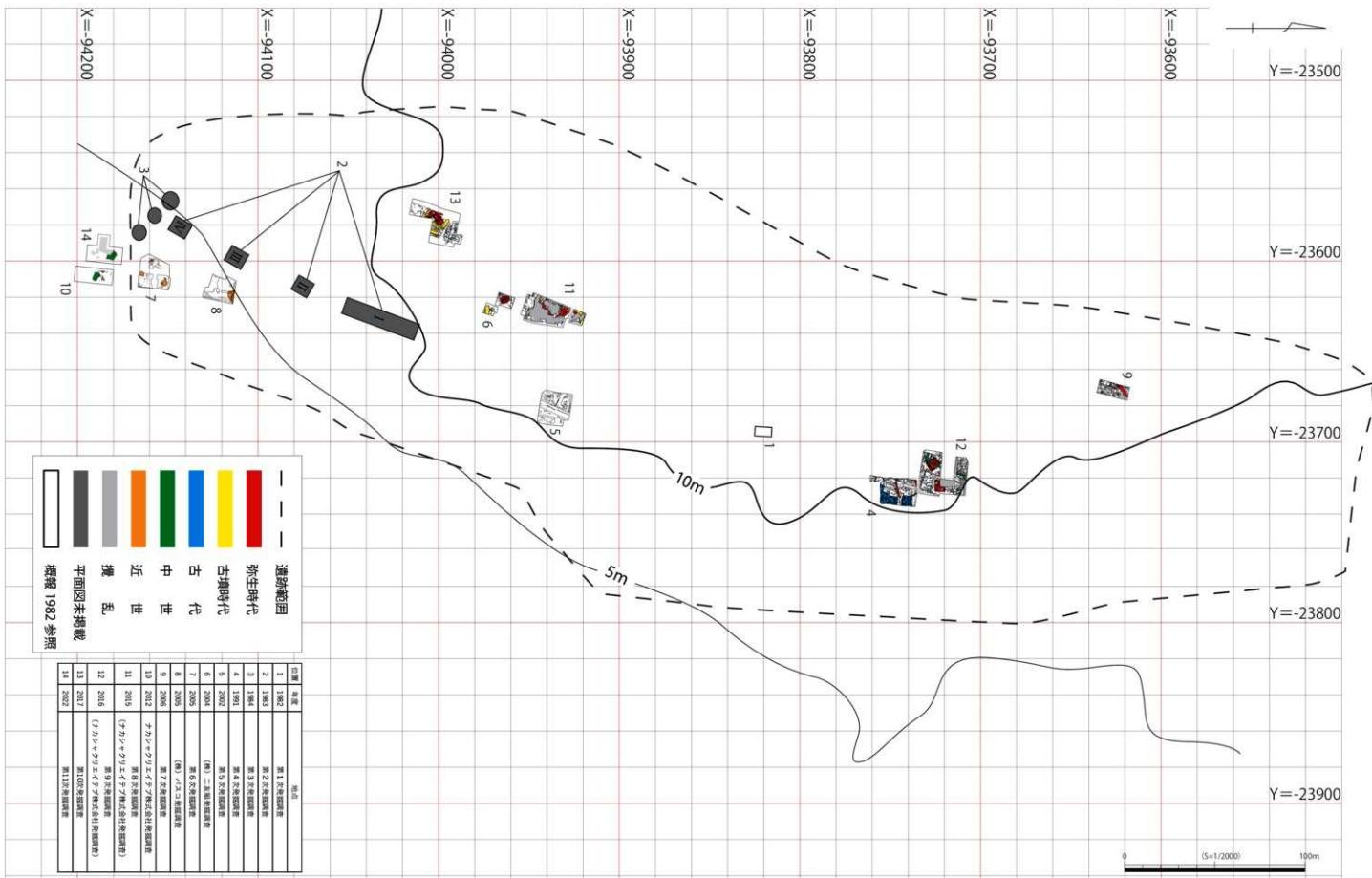
以上、既往調査と遺構の分布について述べた。弥生時代中期から近世、近現代にいたる活動の痕跡が認められる（注5）が、近世以前の様相については断片的で、特に遺跡の西側については調査成果が希薄であることから、分からぬといいうのが実情である。然しながら着実に調査成果の蓄積は進んでおり、一部では弥生時代における墓域から居住域への変遷と円筒埴輪を有する古墳の展開をうかがい知ることができる。また、今回の調査で低地上において中世以降の活動の痕跡が確認され、「不二見原」と呼ばれた当地における土地利用の一端を確認することができたのは大きな成果といえよう。最後に今後の熱田台地上の調査研究がより発展することを望んでやまない。（久富）

注

- (1) 山下峰司 1995『灰釉陶器・山茶碗』『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
(2) 鈴木正貴 1996『東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜』『鍋と甕 そのデザイン』

東海考古学フォーラム

- (3) 後藤太一 2006『平成17年度 富士見町遺跡発掘調査』株式会社 玉善
水野裕之 2006『富士見町遺跡第6次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
(4) 後藤太一 2012『名古屋市中区 富士見町遺跡 大井町302番地内埋蔵文化財調査報告書』
株式会社マルモ
(5) 和田英雄の調査により第5次調査区の南側で縄文晩期の竪穴建物と推定される遺構と第3次II区の西側で縄文晩期の土坑が確認されている。
伊藤正人 1992『富士見町遺跡第4次発掘調査の概要』名古屋市教育委員会
和田英雄 1978『熱田台地北部東縁の縄文晩期遺跡の分布について』『古代人』第34号



参考文献

〔富士見町遺跡〕

- 名古屋市見晴台考古資料館編 1982『富士見町遺跡発掘調査概要報告書』
『昭和 57 年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
①平出紀男・野澤則幸ほか 1983『中区大井町所在 富士見町遺跡 第2次調査の概要』
富士見町遺跡発掘調査会
②山田鉱一ほか 1985『富士見町遺跡発掘調査概要報告書』富士見町遺跡調査会
③伊藤正人 1992『富士見町遺跡第4次発掘調査の概要』名古屋市教育委員会
④野澤則幸ほか 2002『富士見町遺跡第5次・白川公園第4次』名古屋市教育委員会
⑤大浜良介 2004『富士見町遺跡発掘調査報告書』株式会社 二友組
⑥後藤太一 2006『平成 17 年度 富士見町遺跡発掘調査』株式会社 玉善
⑦水野裕之 2006『富士見町遺跡第6次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
⑧伊藤厚史 2007『埋蔵文化財調査報告書 55』『富士見町遺跡（第7次）』名古屋市文化財調査報告 70
名古屋市教育委員会
⑨後藤太一 2012『名古屋市中区 富士見町遺跡 大井町 302 番地内埋蔵文化財調査報告書』
株式会社マルモ
⑩後藤太一 2015『富士見町遺跡第8次発掘調査報告書』ナカシャクリエイティブ株式会社
⑪後藤太一 2017『富士見町遺跡第9次発掘調査報告書』ナカシャクリエイティブ株式会社
⑫近藤真人・大岡由起子ほか 2017『富士見町遺跡第10次発掘調査報告書』
株式会社レクスト・株式会社イビソク

〔土師器〕

- 鈴木正貴 1996『東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜』『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム
〔須恵器〕

東海上器研究会 2000『発表要旨』『消費地編 I』『須恵器生産の出現から消滅』東海上器研究会

〔山茶碗・施釉陶器・磁器〕

- 山下峰司 1995『灰釉陶器・山茶碗』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
藤沢良祐 1995『古瀬戸』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究 -日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀-』
京都編集工房

図 版



1. 北区 SD01 確認状況（南から）



2. 北区 SD01 完掘状況（南から）



3. 北区北壁土層断面（南から）



4. 北区東壁土層断面（西から）



5. 北区 SD01 完掘状況（東から）



6. 北区 SD01 土層断面（西から）



7. 北区 SD01 東壁土層断面（西から）



8. 南区完掘状況（北から）



9. 南区完掘状況（南から）



10. 南区完掘状況（西から）



11. 西区完掘状況（南から）



12. 西区完掘状況（南から）

図版
4
遺物
1



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



12



13



11



14



15



16



報 告 書 抄 錄

富士見町遺跡（第11次）発掘調査報告書

令和5年7月31日発行

編 集 安西工業株式会社 名古屋支店
発 行 〒453-0016 愛知県名古屋市中村区竹橋町17-9
TEL 052-526-3660
保 管 名古屋市教育委員会
〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1
TEL 052-972-3269
印刷・製本 藤井印刷所
〒674-0083 兵庫県明石市魚住町住吉二丁目14-3
TEL 078-947-8488